

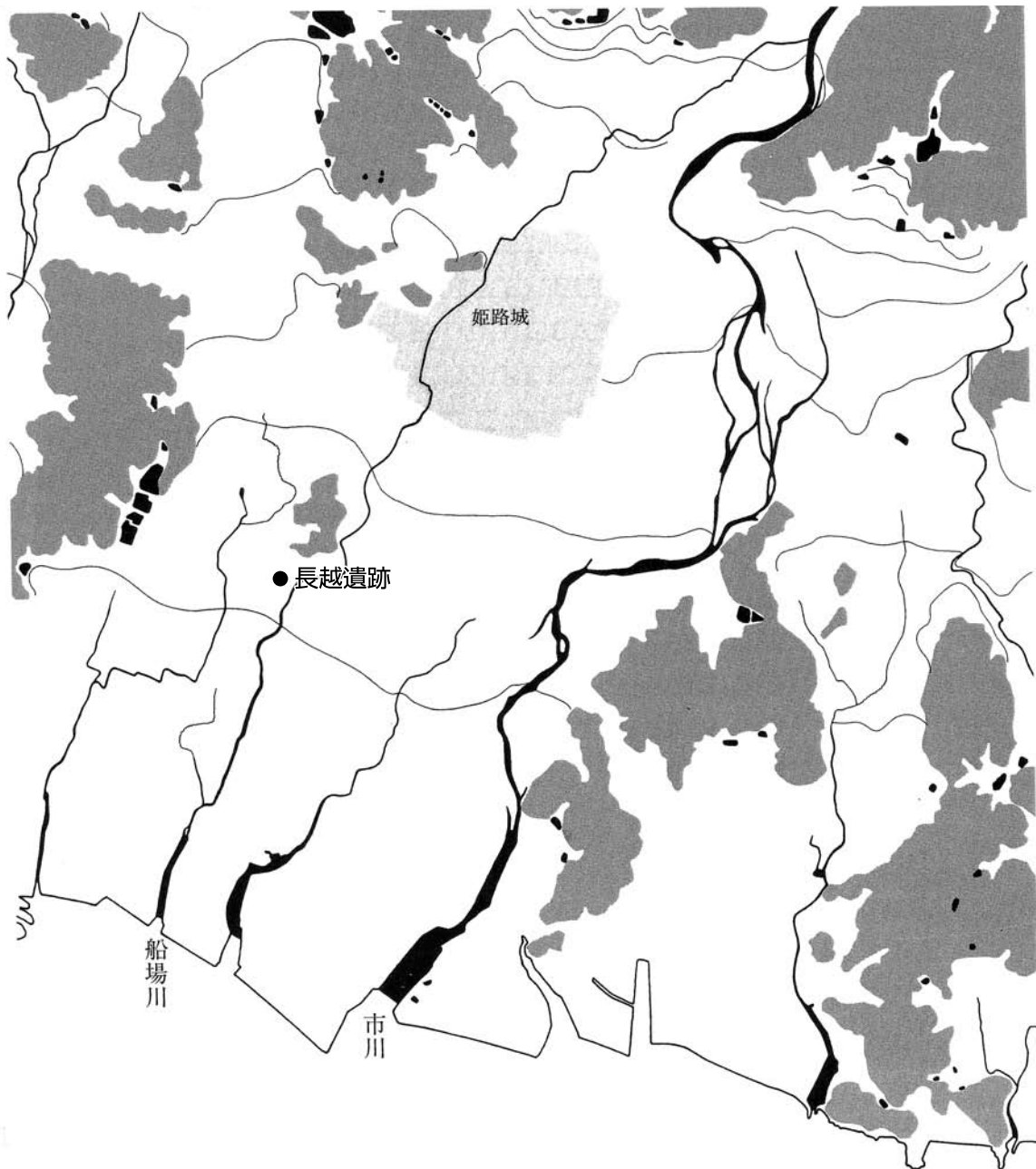
播磨・長越遺跡出土の準構造船塀板について

中村 弘

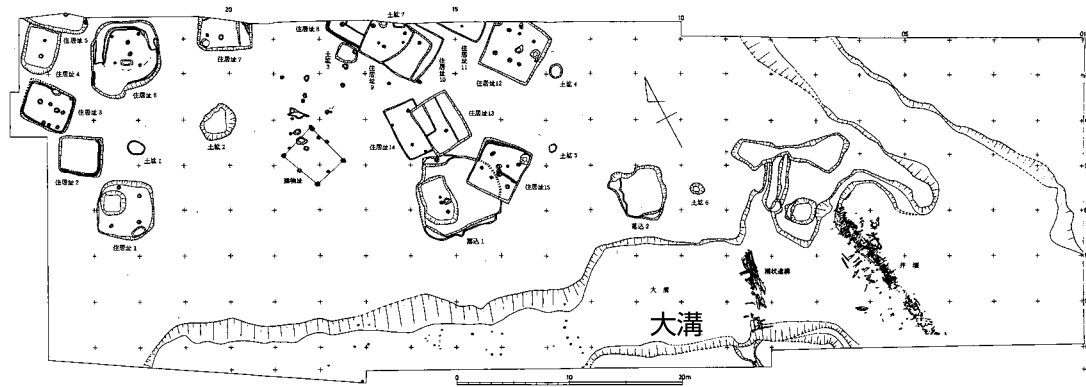
1. はじめに

平成19年10月に兵庫県立考古博物館が開館した。当館では、従来の「見せる」という知識を与えるための展示ではなく、来館者に参加・体験してもらい、「感じる」「考える」といった来館者が主体となる「学びの場」を提供することを主眼としている。

そのため、展示品には実物資料だけではなく、理解を助けるため、あるいは疑問をもってもらいた



第1図 遺跡の位置



第2図 遺構平面図

めの様々な造形品が製作されている。その中の一つに古墳時代の準構造船がある。準構造船は造形品の中でもっとも大型のもので、袴狭遺跡から出土した船団線刻画木製品〔兵庫県教育委員会 2002〕を契機とし、復原にあたっては、船形埴輪や出土船、原始絵画、民俗資料などを参考にしている。週に1回（現在は日曜日の11:00～12:00）、学芸員の付き添いで来館者に乗船してもらい、見るだけではわからないような船の広さ、構造、船上からの視野などを感じてもらい、そこから始まる遠い過去への思い、そして次々にわき起こる疑問などを通して、学芸員と来館者の楽しい時間を共有する場となっている。

さて、準構造船の復原に関する様々な情報や経過については他の機会に譲ることとし、ここでは準構造船を復原するために様々な遺跡出土の船材について調べていた際、かつて用途不明品として報告されていたものが、新たに準構造船の部材であることが判明した木製品について紹介し、他の類例との比較検討を行うこととする。

2. 長越遺跡出土準構造船堅板について

長越遺跡は、兵庫県姫路市飯田字長越に所在する沖積地の遺跡で（第1図）、市川の分流である船場川の右岸近くに位置する。昭和31年に発見された遺跡で、兵庫県教育委員会が行った昭和49年・50年の発掘調査については、『播磨・長越遺跡』（兵庫県文化財調査報告第12冊）として昭和53年に発掘調査報告書が刊行されている〔兵庫県教育委員会 1978〕。

発掘調査の結果、長越遺跡は、弥生時代末から古墳時代初頭の集落遺跡であることが判明し、竪穴住居、掘立柱建物、土壇、落ち込み、大溝が検出されている（第2図）。出土遺物は古式土師器が中心で、河内、大和、山陰、北四国（讃岐・阿波）など、多方面からの搬入土器や当地周辺で製作された他地域系の土器が知られている。また、木製品としては農耕具、工具、容器、祭祀具、紡織具、椅子、櫓、建築部材、船などが大溝から出土している。他にも剣形、有孔円盤、勾玉、白玉などの石製模造品や小型倣製鏡が、大溝にかかる橋状遺構付近に集中して出土し、水やそれに関する祭祀が行われていたことを物語っている。特に石製模造品については、大溝出土の土器から、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期と考えられ、国内でも最古級の例として特筆される。

さて、今回堅板として紹介する資料は、報告書の275頁、図165に掲載されている報告番号50のクスノキ製の木製品である（写真1：現況の写真）。この木製品は大溝から出土しており、共伴した土



① 豎板内面



② 豎板外面

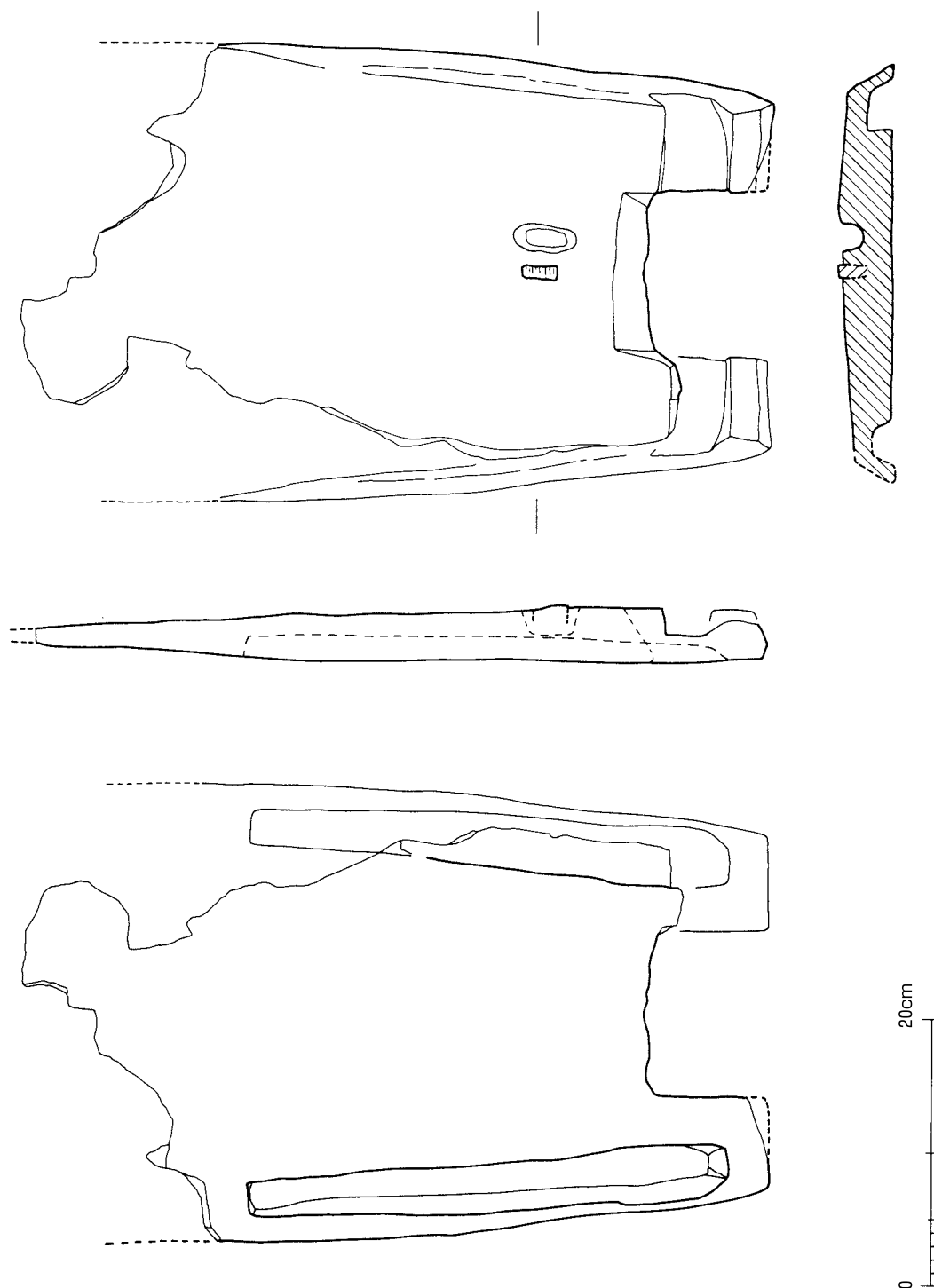


③ 豎板内面部分
(舷側板がはまる溝)



④ 豎板外面部分
(船底部と組み合う部分)

写真1 豎板



第3図 豎板実測図

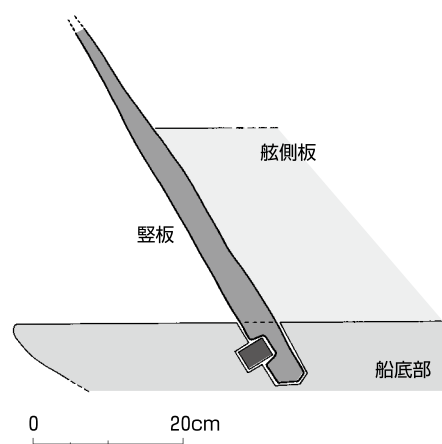
器から、時期は庄内式併行期と考えられている。報告当時は堅板についての良好な類例資料がなかったため、「複雑加工木製品」として報告されているが、その後の昭和 58 年に大阪府久宝寺遺跡で発見された準構造船の良好な資料〔大阪府教育委員会 1987、大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1999〕などが加わったため、この「複雑加工木製品」が準構造船の堅板であると推定できるにいたった。

そこで今回、報告書の実測図を使用し、この資料を堅板として図に修正を加えたのが第 3 図である。報告書で記されていた破線で示された復原線を訂正し、天地や角度を若干調整したが、欠損部などの遺物に対しての観察は特に変更する必要はなかった。

堅板は上部、及び船の内側から見て右側が大きく欠損している。しかし、堅板の特徴である、①舷側板を結合させるために彫られた左右一對の細長い溝がある、②その左右の溝の間隔は上部に向かって広がっている、③堅板下部に、船底部を跨ぐような方形の挟り込みがある、④船底部と堅板を結合させる貫（栓）を通すための挟り込みがある、⑤堅板と船底部が傾斜して結合するように、堅板と船底部上面が接する部分は斜めに削られている、などが観察できる。このような特徴は、大きさは異なるものの、先の久宝寺遺跡出土の堅板と非常によく似た構造であることがわかる。また、樹種については、久宝寺遺跡例がスギであるのに対し、本例はクスノキであるという違いがあるが、『日本書紀』巻第一の「杉及櫟樟、此両樹者、可以為浮寶」とあるように、「浮寶」すなわち船には、スギと並んでクスノキも用いられていたようである。また、これまでに報告されている当遺跡出土の準構造船船底部や他遺跡からの出土品でも船材としてクスノキが用いられていることが明らかとなっており、樹種から船材として問題はない。

以上のことから、この木製品が準構造船の堅板であることが明らかである。この堅板の大きさは下幅が約 26cm、現存最大幅が約 35cm、左右の舷側板をはめる溝の間隔は下部で約 19cm、上部で約 25cm を測る。舷側板と堅板が接する部分の長さは、舷側板をはめるための溝から推定すると約 35cm であるが、堅板は約 30° 前方向に傾くように加工されているため（第 4 図）、舷側板の幅は約 25cm 程度であったと考えられる。

堅板全体の高さについては上方が欠損しているため不明といわざるを得ないが、もっとも大きさの近い滋賀県入江内湖遺跡例（第 5 図 入江内湖 1）からすると、およそ 60cm 程度の高さであったかと思われる。ただし、石川県千代・能美遺跡出土の堅板〔財団法人石川県埋蔵文化財センター 2001〕のように、幅が狭くても長さがある例（全長約 104cm、幅約 26cm）もあるので確かなことはわからないが、舷側板の高さが千代・能美遺跡例よりは低いことから、千代・能美遺跡例ほど高くはないのかもしれない⁽¹⁾。



第 4 図 堅板の角度

3. 比較検討

前述の復原をもとに、長越遺跡出土豎板を他の例と比較してみる。まず、久宝寺遺跡例と比較すると、先述したように豎板としての特徴を持ち合わせており、両者は構造上、非常に類似している。しかし、大きさが絶対的に違うことと、長越遺跡例は久宝寺遺跡例ほどの厚み（内側が挟られているため、膨らみ）がなく、平らな板状である点が異なっている。豎板の厚みは、豎板を自立させるために必要なものであり、特に久宝寺遺跡例のような大型のものであれば特に厚いものが必要であったと考えられるが、長越遺跡例のようなやや小型のものはその必要がなく、板状のものでも自立できるために薄いのであろう。

次に、琵琶湖周辺で出土している準構造船と比較してみる（第5図）。琵琶湖周辺の準構造船については、横田洋三氏の論に詳しく、氏の業績を参考とする〔横田 2004〕。まず、琵琶湖周辺から出土した準構造船は小型のものが多く、湖上で漁猟や運搬に使われたと考えられるが、このような小型の船にも久宝寺遺跡例や船形埴輪に表現されたような豎板、舷側板をもつ準構造船の構造を採用していることがわかる。このことは同じように小型である長越遺跡例にもいえることである。

また、長越遺跡例の特筆すべき点として、外面に認められる1対の小穴が挙げられる（写真2）。この穴は長さ約3.0cm、幅約0.9cm、深さ約1.2cmを測るが、片方には穴に詰められた栓によって固定された桜皮が遺存している。これと同じようなものが久宝寺遺跡例にも認められるが、久宝寺遺跡例は、「豎板外面にもひび割れが中央に走っており、その割れの中央両側を樹皮でもって鋸状に打ち込んで」〔一ノ瀬 1987〕あったことから、あたかも割れを留めるための装置のようにはうかがえる。しかし、長越遺跡例ではそのような割れが認められないにもかかわらず、



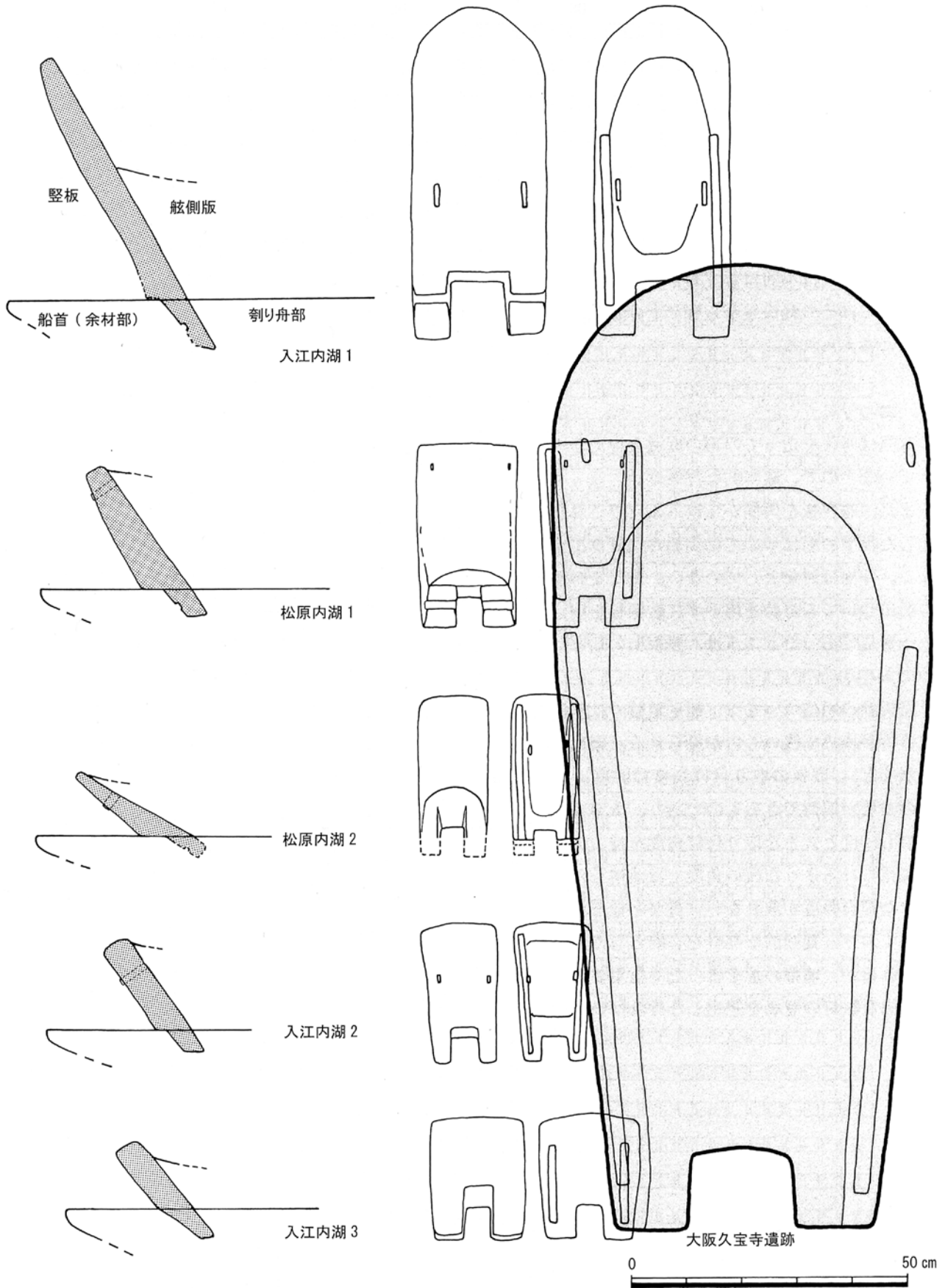
写真2 豎板外側の小穴

これら1対の小穴が存在することから、小穴と割れには関係がなく、割れ留め以外の何か別の用途を考えなければならない。小穴が開けられた部分は船の前面か後面のいずれかであるが、前面であったとすると何らかの飾りが付けられていたのかもしれない。近世においては、船首の舳板（みよしいた）に漁村ごとに違う飾りを付け、漁場において自他の船を見分ける目印としていたという⁽²⁾。長越遺跡例の小穴の場所は、豎板の下方にあたることから、上方へ伸びる飾りを取り付けていたのかも知れない。船形埴輪も含めて、今後の類例に期待したい。

4. おわりに

これまで、長越遺跡から出土した準構造船の部材として船底部の一部が知られていたが、今回それに豎板が加わることとなった。両資料はいずれもクスノキで作られており、同じ船を構成していた部材である可能性も考えられるが、両者は規模が違っており、別個体の可能性の方が高い。

長越遺跡からは、前述したとおり他地域との交流を示す土器が多く出土している。また、揖保川と市川に挟まれた地域では、庄内期に広範囲にわたって活発な交流が行われていたことが明らかとなっ



出土堅板と刳り舟部への挿着状態（堅板は欠損部を反転復元している）
および大型船堅板との大きさの比較

第5図 琵琶湖周辺の堅板（〔横田 2004〕より）

ている〔岸本2006〕。こうした背景には長越遺跡から出土したような準構造船の活躍があっただろうし、言い換えれば準構造船の造船技術が発達、安定化したことによって、土器にうかがえるような活発な交流を行うことができたのであろう。

今後も、新たに出土した資料だけでなく、不明品として報告された既存資料についても再度検討し、弥生時代から古墳時代にかけて造られた準構造船の基本構造の復元とバリエーションについて調べ、引いては造船技術の向上が社会に果たした役割について考えていきたい。

最後に、本稿をまとめるにあたり、資料の見学に際しては伊藤雅文氏に、船については松木哲先生にお世話になりました。記して感謝の意を表します。

【引用文献】

- 一ノ瀬和夫 1987 年「倭人船－久宝寺遺跡出土船材をめぐって－」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念論集
大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987 年『久宝寺南（その2）』
大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1999 年『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』
岸本道昭 2006 年「播磨の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』
ふたかみ邪馬台国シンポジウム6
財団法人石川県埋蔵文化財センター 2001 年「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号
兵庫県教育委員会 2002 年『入佐川遺跡』兵庫県発掘調査報告第229集
兵庫県教育委員会 1978 年『播磨・長越遺跡』兵庫県発掘調査報告第12冊
横田洋三 2004 年「準構造船ノート」『紀要』第17号 財団法人滋賀県文化財保護協会

（註）

- (1) 石川県埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。記して感謝いたします。
- (2) 松木哲先生のご教示による。

（図版の出典）

- 第1図 兵庫県教育委員会 2005 年『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告第286冊を改変。
第2図 〔兵庫県教育委員会 1978〕より。
第3図 〔兵庫県教育委員会 1978〕より。再トレース、一部改変。
第5図 〔横田 2004〕より。